



## 進化と変化の大切さ (世界史を変えた新素材と発想)

(4月のごあいさつ)

2019年4月1日(月)

棒高跳びの記録は、**ポールの材質**に大きく負っているという。1937年、セフトンが4.54mを跳んでから、棒高跳びの世界記録は、1964年ハンセンの5.28mに至るまで大きな変化はなかった。ハンセン以後の世界記録は、5m台からウクライナのセルゲイ・ブブカの6m超えなどと大きく記録が伸びている。

この記録には、棒高跳びの**ポールの材質の変化**が大いに関係しているという。セフトンの時代に、竹のポールからアルミのポールと変わった。そして、ハンセンの時代には、グラスファイバーとなった。

その昔、羊飼いが木材を使って川を飛び越していたことがその発祥といわれる棒高跳びは、17世紀後半の頃にはヒッコリーという堅い木の棒を使っていながら1900年代に入って竹のポールを使い、竹の材質の良い日本の西田、大江などの選手が1936年のベルリン大会で4メートル35の好記録を出した。(岡部恒治著 経済数学入門 2000.12 新世社刊から)

上記の記事が面白かったので、佐藤健太郎著「世界を変えた新素材」(2019.2新潮社刊)を読んでみた。「変化する」ことは、人間社会の本質であり、巨大な変化というものは、あつという間に起こり、今まであった全てをひっくり返し、入れ替えてしまう。音楽の録音メディアを例にすると、戦後に登場し、長きにわたって音楽の普及を伝えてきたレコード盤は、1980年代にコンパクトディスク(CD)が登場すると、あつという間に姿を消し、そのCDも、ウェブによる配信や動画サイトが取って変わり、勢力が衰えつつある。明日の変化を予測することはできないし、変化を起こすことは、尚難しい。

日本の経済の変化(低落)のスピードは、目に見えないかもしれないが、確実にそのスピードを増している。沖縄の平成は確かに良かったが、日本の「平成は良かった」などという世論調査は、時代遅れのマスコミのタイトルにしかすぎない。変化を起こせない日本、それを放置する日本の政治は、窮屈化する日本の現実から目を外させている主要な原因である。

今こそ、日本にイノベーションが必要と思われる。それは旧態との決別であり、現状の不安定と現状を破壊する勇気である。明の永楽帝が、イスラム教徒であった鄭和を総司令官に任命し、中国史上初めてであり世界史上にも例のない、西方へ送り出した取宝船62隻を想起すればよい。それぞれの一隻の長さは、海上自衛隊の護衛艦に相当する全長150メートル、8,000t級の船だ。乗組員は二万数千人に上り、東南アジア、インド、ホルムズから紅海沿岸、アフリカ東岸にまで進出した。永楽帝は、そのような艦隊を、七次に渡って世界に派遣し中国の海外貿易の推進と雄飛を試みた。これこそイノベーションである。